



●研究会大会の準備を始めましょう！

令和4年度秋の研究会大会開催のお知らせの第1報が、日本色彩学会メールニュースNo.325で告知されました。

実行委員長は溝上陽子先生です。(色覚研究会/千葉大学)

2022年11月26(土)が色彩文化系3研究会合同発表会で、色彩教材研究会、くらしの色彩研究会、美しい日本の色彩研究会が参加の予定です。

11月27日(日)が色彩科学系5研究会合同発表会で、画像色彩研究会、感性・データ科学・コスメティクス研究会、視覚情報基礎研究会、色覚研究会、測色研究会の参加が予定されています。

申込〆切は8月22日(月)で、アブストラクト・予稿集原稿締切は10月中旬が予定されています。

学会の存在意義は、研究発表と論文掲載と書いていいでしょう。

今日から研究発表の準備に取りかかってください。15分程度の発表です。日頃、関心を持っているテーマを、思い切ってまとめる決心をしてください。初めての方は、新しい世界が広がると期待してください。

(学会メールニュースNo.325から引用)

日本の美を貫く軽み—中井正一説—

日本美学史は、美学者・評論家中井正一(なかいまさかず; 1900-1952)氏に始まると言われる。中井は美には秩序があり、美を景色・自然美と、人間が創造した道具や建築物のような技術美、絵画・音楽のような芸術美という三つに大別している(『美学入門』朝日選書32、朝日新聞社、1975年を参照)。

中井は、美意識とは、自分の快い自由な心持ちを感じることであり、美は常に無限に変わりつつあると捉える。『万葉集』の「さやけさ」や、『古今和歌集』の「物のあわれ」、中世の「数寄・侘び・寂び・幽玄」、江戸時代の「いき」には、清純を求め、清く新しく、軽く、生き生きと、浅い川を自由自在に流れる水のような美しさがあると指摘する。その軽み・いさぎよさ・素直さ・果敢さ・地味の美に、日本特有の美があると言及する。

つまり、「無所住心」(住みつく所なき心・一つの所に住みつけない清々しい軽い心)の爽やかさ、流動してやまぬ自由な魂に、日本の美の特徴があると捉える。

それは、何も置かれていない「虚ろさ」や、自然の与える素材に対する忠実さ、現実への深い信頼感に見られる特性である。

(吉村耕治)

●浮世絵の色材の色「赤」

作品鑑賞の中でも、多くの浮世絵、錦絵を目にすることがある。木版手摺り、木版機械刷りなど手段の違いはあるが、一見さほど仕上りや見た目の違いが大きく感じられない作品もある。作品を目にする度に気になるのは、「赤」の色の濃淡、色数などである。そして、時代による作風や使用色材の色の変遷は、大変興味深い。

今年開催された「赤」に特化した浮世絵の作品の展覧会を太田記念美術館にて鑑賞した。分かり易い制作用語の解説、時代や作者別、色材などを含め、浮世絵の歴史である。

和の色名として学ぶ頻度が高い真朱や、紅花による紅色、蘇芳、茜色、弁柄色、そして鉛丹色など様々な「赤」がある。

特に江戸時代に用いられた染料や顔料として、紅花、蘇芳、茜、弁柄、朱(鉛丹)などの解説があり、紅絵、紅摺絵、紅嫌い、赤絵などに使われる「赤」の歴史を再認識した。

江戸時代の鈴木春信の色数少ない、淡く優しい色の作品と、目が醒めるような濃く鮮やかな月岡芳年などの明治時代の錦絵との作品の比較ができた。明治に海外から入った「赤」の絵具の華やかな美しさは、当時の人々の心を熱く躍らせたことでしょう。(瀧川優子)